

試訳 マーチン『東インド貿易の諸考察』〔1〕

馬場 宏二

1. はじめに一解説に代えて

ヘンリー・マーチン (Henry Martyn, 1665～1721) 著『東インド貿易の諸考察』1701年を訳出する。ただし、当面体力と時間に極度の制約があり、紙幅の制限もあるので、いきなり完訳ではなく、当面、質的には試訳、量的にはほんの冒頭部分の訳にとどまる。

因に本書の構成をざっと見ておけば、全22章から成るが、第1章で東インド貿易反対論を一括して示し、第2章以下でこれを詳細に批判する。それは東インド貿易支持を唱えた第2～第16章と、比較のために英蘭鯨漁業の優劣を論じた第17～第22章に大別出来るが、東インド貿易支持論はさらに、金銀流出を論じた第2章～第9章、生産・雇用を論じた第10～第13章、地代を論じた第14～16章に細分出来る。本訳稿は、このうちの、反対論を一括した第1章と、それに対する批判の冒頭に当る第2章までを取り上げる。議論の内容とマーチンの論法はこれだけでも掴めるはずである。後に、時間のある時にこれを手掛かりに、いずれは完訳に仕上げたいと思っている。

さて、この書は、著者、内容ともに極めて興味深いものだが、著者の経歴について十分に判らないところがあり、特にマーチンの「変説」と呼ばれる、自由貿易主義から重商主義的保護主義への転換（と、表面上は更に徹底した自由貿易主義への再転換）については、未だに納得の行く解釈が出来ない。しかし、その『東インド貿易の諸考察』は、スミス『国富論』の3/4世紀前に現れた、ヨリ徹底した自由貿易の主張である。しかも経済理論的には、驚くべく緻密鋭利な論理と体系性を示すばかりか、いくつかの重要な論点で『国富論』に先行し、その重要な構成要素となった、極めて先駆的な経済学書である。これまで邦訳がなかったのが不思議なくらいである。

これを邦訳するには、17世紀後半から18世紀初頭にかけての英文を読み慣れていなければならないのだが、訳者にその素養はない。そのため所々で思わぬ誤訳をするかも知れないが、これまで読んだマーチンの文体の特徴に照らして、極力正確な邦訳を示したいと考える。そこで以下、解説代わりに、訳者の本書研究の経緯を述べておく。

1-A. 訳者のアプローチ

訳者がこの書と著者に気付いたのは、もともと畏友高山満の定年退職記念号（東京経済大学『会誌』207号）に寄稿を求められ、高山の専攻分野に合わせて経済原論をテーマとし、そのた

めに『国富論』冒頭の分業論と、『資本論』第一巻の協業論・分業論のあたりを読み直した時⁽¹⁾からである。その際気付いたのは、『資本論』第一巻第10章から第14章の範囲で、著者名なし⁽²⁾に『イギリスにとっての東インド貿易の諸利益』⁽³⁾が計8回引用されていたことである。あまり聞いたことのない書名だが、引用頻度が高く、マルクスが引用した限りでも、相当に興味深い議論をしているように受け取れた。そこで、大英図書館British Libraryから原文を取り寄せて見ることにした。大東文化大学図書館の鶴田香織司書が雑事一切を引き受けてくれて、大英図書館所蔵の、おそらくマルクスが使用したのと同じものであろう『諸利益』原文のコピーが入手出来た。

しばらくしてコピーを読んで見るとまことに面白い。この本が書かれた18世紀初頭といえ、重商主義的保護政策がこれから展開される時点である。その時期に徹底した自由貿易の利を唱え、それを根拠付ける論理が、整然と一貫しているばかりか、時にハッとするほど鋭い。標準的な経済学史の書にもさほど詳しい紹介があるわけではなく、古典扱いはされていない。放置できないから、日本での既成の研究を多少調べた上で『『資本論』の一文献』⁽⁴⁾なる紹介文を書いた。無論探索不十分で、著者についてはノース説とマーチン説と両方あるが、当面どちらでも良い、としたままだった。

ところが友人の田淵太一氏と森建資氏から、著者はヘンリー・マーチンであり、その論拠はマクラウドの論文⁽⁵⁾にあると教えられ、併せて、大英図書館が完全な形では持っていない、同書の初版『東インド貿易の諸考察』⁽⁶⁾がゴールドスミス図書館にあり、そのコピーは日本にいても入手可能だと教えられた。マクラウドは、出版者A、チャーチルがこの本をジョン・ロックに贈呈する際の送り状に、著者がヘンリー・マーチンであると、氏名ばかりか人物像まで明記していることを発見した。この考証で、著者がヘンリー・マーチンであることは疑いなくなったわけだが、マーチン自身の経歴や思想遍歴、それに出版事情に、まだ釈然としないところが何点か残った。

そこでマクラウドが考証過程で依拠した、マーチンを高く評価していたJ.R.マカロック⁽⁷⁾やP.J.トーマス⁽⁸⁾の叙述を参考にわずかず補いをつけるとともに、マーチンが寄稿したとされるスペクテイター The Spectator⁽⁹⁾紙やブリティシ・マーチャント The British Merchant⁽¹⁰⁾紙、さらに珍しくマーチンの署名のある報告文⁽¹¹⁾などやや広く渉獵して、いくつかのマーチン論⁽¹²⁾を書いた。それでも彼の経歴と思想的屈折については、なお小さからぬ疑問が残っている。

マーチン変説の根本的理由は未だに良く解からない。しかし、最近シェクスピア学者、平田満男氏から、もともと著者の著作権より出版者の持つ版權の方が遙に強力だったと教えられた。そうなら、初版から再版にかけて、マーチン自身の自由貿易主義が徹底したと解するより、チャーチル社から版權（あるいは売れ残り本そのものとともに）を入手したロバーツ社が、自社の政策的主張に合わせて、書名や副題をより徹底的な自由貿易主義論に変更した表紙を付けて再版としたと考えた方が解かりやすくなる。同社は、これも自由貿易論だと解されているジャーヴェース『世界貿易の体系もしくは理論』を同じ年に出版しているから、自由貿易論者なのであろう。その主張があるから、マーチンの書を再版するに当たって、初版以上に激しい印象を与える表紙を

付したと考えられる。

註

- (1) 馬場宏二「協業分業・スミスとマルクス」1998年2月、後馬場『マルクス経済学の活き方』2003年御茶の水書房、第六章
- (2) マルクスはマカロックの成果を意図的に無視したらしく、せつかくマカロックが『諸考察』と『諸利益』を同じものだと指摘しているのに、頑固に再版名で引用した。そのため『資本論』には初版『諸考察』の名が出てこない（『剰余価値学説史』のダヴィナントに關説した箇所では『諸考察』と記しているから、知らなかったわけではない）ばかりか、マカロックが遠慮がちに示唆した、著者がヘンリー・マーチンである事実にも到達し得なかった。なお、現行版『資本論』の文献註は、『諸利益』の著者はスティーヴン・アディントンだとされている、と述べている（国民文庫版『資本論③』の文献註）がアディントンは神学者で、『諸利益』刊行時にはまだ生れていない（国民文庫版『資本論』⑨人名辞典）から、全く別人である。管見の限り他にアディントン著者説はない。マルエン全集編纂委員会の間違い—おそらくアディントンをアディソンと混交した—だが、アディソンは『スペクテーター』紙を編集してマーチンの寄稿と関わっているものの、自分で『東インド貿易の諸利益』を書いたのではない。
- (3) *The advantages of the East-India Trade to England, considere'd. wherein all the Objections to that Trade, with relation; I To the EXPORTATION of BULLION, for Manufactures consum'd in England: II. to the loss of EMPLOYMENT for our own hand: III. To the abatement of the rents: are fully Answere'd. with a comparison of the East-India and fishing trades, London printed for J, Roberts.MDCCXX*
- (4) 馬場宏二「『資本論』の一文献」2002年9月、後馬場前掲『マルクス経済学の活き方』第14章
- (5) Clistine Mcleod, Henry Martin and the authorship of 'considerations upon the East-India Trade' in *BULLETIN of The Institute of HISTORICAL RESERCH*, vol. LVI, 1893
- (6) *Considerations upon the East-India Trade in tantas brevi creverant opes. seu martimis, seu terrestribus fructibus, seu multitudnis incremento, seu sanctitate disciplinae Tit liv. London, printed for A & J. Chrchill. MDCCI.*
- (7) マカロックの作品中、この際特に重要なのは右の二点である。①. J. R. McCULLOCH, *The literature of political Economy*, London 1845, esp. 99~102. ②. J. R. McCULLOCH ed., *A Select collection of Early English Tracts on Commerce*, London, 1852. 因に本文で言うマカロック版はこの書に含まれた Considerations…を指す。
- (8) P. J. Thomas, *Mercantilism and the East India Trade*, 1926, Kelly reprint 1970, 参照、馬場宏二 [P.J. トーマス『重商主義と東インド貿易』2007年7月、後拙著『経済学古典探索』第六章
- (9) ここでは杉本俊朗・水田洋両先生の御教示により、Donald Bond ed., *The Spectator*, 5vols Oxford Clarendonpress, 1965（東京大学文学部図書蔵）を利用した。
- (10) ここではCharles King ed., *The British Merchant*, 3vols, 1721（東京大学総合図書館蔵）に依拠した。
- (11) Henry Martyn, Inspector General of the Exports and Imports "His Observations upon the Account of Exports and Imports for 17 years ending at Christmas 1714": "An Essay Towards Finding the Ballance of our whole Trade, annually from Christmas of 1698 to Christmas 1719" in G. N. Clark et al, ed., *GUIDE to ENGLISH COMMERCIAL STATISTICS 1696-1782*, Royal Historical Society, 1938
- (12) 訳者のマーチン研究成果を執筆順に並べれば以下の如くである。
 - * 「『資本論』の一文献」2002年9月、拙著『マルクス経済学の活き方』第14章
 - * 「ヘンリー・マーチンの経済学」2003年5月 拙著『もう一つの経済学』第5章
 - * 「『資本論』も読み方」2004年2月 拙著『もう一つの経済学』第10章

- * 『『経済学批判』の批判』2004年7月 拙著『もう一つの経済学』第11章
- * 「古典派の比較生産費説」2004年7月 拙著『もう一つの経済学』第8章
- * 「ペティ経済学の継承」2005年3月 拙著『もう一つの経済学』第12章
- * 「マーチン“変説”の探究」2005年7月 拙著『経済学古典探索』第5章

2. 底本

こうして、現在入手可能な版は三つあることが判った。1701年刊の初版『東インド貿易の諸考察』（『諸考察』と略称）、1720年の再版『イングランドにとっての東インド貿易の諸利益』（『諸利益』と略称）、そしてJ. R.マカロックがロンドン経済学クラブに依頼されて編んだ『イギリス初期貿易論集』1854年に収録した『諸考察』（『マカロック版』と略称）、の三つである。表紙部分には、書名、副題、出版社名、出版年などさまざまな違いがあり、マカロック版には誤りもあるが、それについては既出の拙稿で紹介してある。必要なのは本文だが、本文は、これまでの考証によればいずれの版でも全く同じであり、だから表紙部分の違いを明記しておけば、翻訳の底本としてどの版を用いてもかまわないことになる。ただし、活字体が、マカロック版ではわれわれの見慣れた、19世紀以降の常用形であるのに対して、初版と再版では、頁末にキャッチワードを付しLongSや筆記体風のCを常用するなど古い形であり、慣れるまではいささか読み難い。その点を別とすれば、底本としてはどの版を用いても差はないので、ひとまず1701年刊の初版を用いる。

3. 翻訳

3-A. 表紙

東インド貿易に関する諸考察

By Henry Martyn Ea. ⁽¹³⁾

海の恵みによってか、地の穰りによってか、人口の増加によってか、教育の神秘によってか、短期間に、富はかくも創出された⁽¹⁴⁾。

ロンドンA. & J.チャーチル社。ペーターノスター街、ブラックスワンMDCC I

3-B. 読者へ

この冊子に書かれていることの大部分は、世に一般に受け入れられている考え方とは直接に対立する。それゆえ、最も明確な証拠なしに公表さるべきではない。そのため、著者は、読者を快がらせるために比較級と最上級を用いるのではなく、政治算術の方法に即して、自分の意見を数・重量・尺度で表わすように務めた⁽¹⁵⁾。著者は、かの幾何学の原理同様に確かでない何事についても、自信を持って語るものではないとお考えいただきたい。

かの東インド貿易、会社の分割、それが国の政治情勢に及ぼす影響が、広く人々の会話の話題になりつつある。大いなる自由を持つ人全てがこれらのことを非難している。あるものは両会

社の一方を解体せよと言ひ、ある者は両社とも解体せよと言ひ、ある者は両社の連合を唱え、多くの者はこの貿易自体に反対だと言ふ。東インド貿易が我が王国の金銀 (Bullion, 以下同じ) を運び去り、製造業を破壊し、地代を引き下げるからだと言ふのである。著者もまた、他の人々同様、これらのことを考えて来た。そして金銀も製造業も地代も、東インド貿易によって増えると、確信するに至った。そして他の事柄同様、両会社の競争によってもっと増える、両社の解体によってもっと増える。それが究極の利益である、と。著者はこれらのことを友人の間ではしばしば語って来た。彼らが著者に向かつて、現時点はこの意見を公表するのに不適當な時期ではない、と忠告してくれたので、理性的に考えても、確信は強いものになった。しかし、これをなすべき時期を逸してはならないから、作文は非常に急いでなされた。同様な理由から、頻繁で不快な中断が免れず、とうとう修正なしで印刷する羽目になった。そして実際、著者による検討さえ行ない得なかった。そのため著者は、多くの過ちになかでも特に言っておきたいこと、不必要な繰り返しや無視や気取りやがあることについては、読者にお詫びしておかねばならない。これは著者が望んで行なつたことではない。望んで行なつたのであれば許しを乞ひはしない。著者は東インド貿易を漁業とのみ比較した。著者は他の産業 (trade) との比較も考えていたのだが、もっとも親しい友人⁽¹⁶⁾ を失つたことによつて断念せざるを得なかった。彼は文体に執着し過ぎ、別のことについて考えることが出来なかつたのである。

3-C. 内容一覧⁽¹⁷⁾

この考察に含まれる事柄は

第一に、東インド貿易に対する反対論、第1章。

第二に、この反対論に対する応答

- I. イングランドで消費される製造品に対して行なわれる金銀の輸出についての反対意見に、以下のごとく反駁され、論証される。
 1. それはより大きな価値に対するより小さな価値の交換である、第2章。二つの会社の競争にも拘らず、実際には、イングランドにとって貿易の利をより大きくする、第3章。インド製造品の輸入によってイングランドの製造業の一部が破壊されるとしても、この貿易はイングランド全体にとってはやはり利益がある、第4章。
 2. 製造品輸入に対して金銀を東インドに輸出することは輸出を増やすことを通じて金銀をより多く輸入することであり、従つて輸出、金銀、貨幣は増える、第5章。輸出は我が国の贅沢や消費が増え、インド製造品が外国で輸入禁止になり外国市場がすでに我が商品で満ち溢れていても、にもかかわらず増加する、第6章。金銀は、造幣局が静止していても増える、第7章。貨幣は紙券が至る所でいかに多く流通していても貨幣である、第8章。
 3. わが王国はイギリス製造品の消費によるよりもインド製造品の消費によってより窮乏化するわけではない。⁽¹⁸⁾
- II. 労働者の雇用が減り我が製造業が破壊されるという、次なる反対論に対しては：以下のご

とく反駁され論証される。

1. われわれが保持するに値するいかなる雇用もこの貿易によって破壊されることはなく、わが王国にとって利のある如何なる製造業も破壊されない。第10章。
 2. この貿易こそが人々をより多く雇用するものであること。
 - (1.) 以前からの製造業を拡大し価格を引き下げることによって。第11章。賃銀引下その他労働者にとっての不都合なしに、第12章。
 - (2.) 人々に新しい雇用を準備することによって。第13章。
- III. 東インド貿易に対する最後の反対論、すなわち地代の減少は、かく応えられ否定される：
1. 農場生産物の価値は貴金属の輸出によって減少する。第14章。
 2. 消費者の減少によって。同上章。
 3. 賃金の低下によって。同上章。
 4. 地主の独占を破壊するためにインドの農産物を全イギリスの市場に行き渡らせることによって：これにはこう応える。
 - (1.) インドの未加工品はイギリスの農場生産物の価値を引き下げない。ましてやインドの製造品には出来ない。同上章。
 - (2.) 製造品の輸入は農場生産物の価値とともに労働の価格を引き下げ得るのみであり、そしてそれによって農場生産物の価値自身を引き上げるに違いないこと。第15章。
 - (3.) これは例示によって確証出来ること。第16章。
 - (4.) 従って貨幣と買い手は売り手や売るものと同様に増え、かくして地主の状況は独占を失うことによって悪くなりはしない。第17章。

第三に、東インド貿易と漁業の比較が行なわれる。ここでは以下が確証される。

- I. 鯨漁業はアイルランドの牛やインドの製造品の輸入ほど利のあるものではなく、しかもいづれより地代を減らすであろう。第18章。
 - II. 現在の状況のもとでは、イギリスの鯨漁業は実行不可能である。第19章。
- III. イギリスが鯨漁業を実行し得るための方法は、
- I. われわれが鯨漁業をオランダ同様に少ない利潤で行ない得るようになる方法。第20章。
 - II. イギリスがオランダ同様に安価に鯨を捕え安価に捌くために
 - (1.) 漁業全てに必要な資材をイギリスでもオランダ同様に安価に作ること。第21章。
 - (2.) 総ての労働と準備作業をオランダ同様に安価にすること。第22章。

註

- (13) ゴールドスミス文庫所蔵の初版に事後的に挿入されたと覚しいペン書き。P. J. トーマスはフォックスウエル教授によってこれが18世紀初頭の手書体であることを突き止め、著者マーチン説の論拠としている。参照、拙著『経済学古典探索』185～186ページ。マカロックが著者マーチン説を極めて臆病な形ながら唱えた (*The Literature of political Economy*, P.102) のも、この書き込みを見ていたためではないかと推測されるがどうだろうか。

- (14) 原文ラテン語。訳者はラテン語が読めないで、前に東京大学社会科学研究所で同僚だった広渡清吾氏がローマ法も研究していたことを思い出し、邦訳をお願いした。初版のこの副題は簡潔穏健なものだが、再版の副題は英語で、書の目次を摘出しただけのものだが、それだけに極度に激烈かつ論争的なものになっている。両版の間の時期にマーチンがBritish Merchant紙に、重商主義的な保護貿易論を執筆していたこととマーチンが再版出版の翌年に病死していることを考えると、この変更は著者の意向によると考えるより、版權を入手したロバーツ社の意向によると考えた方が解かりやすい。事実同社は、同じ年に、別に自由主義的貿易論、ジャーヴェース『世界貿易の体系と理論』を出版している。
- (15) ベティは「私がこのことをおこなうばあいに採用する方法は、現在のところあまりありふれたものではない。私は、比較級や最上級のことばのみを用いたり、思弁的な議論をするかわりに、(私がずっと以前からねらいさだめていた政治算術の一つの見本として、) 自分のいわんとするところを数・重量・または尺度を用いて表現し、感覚にうったえる議論のみを用い、自然のなかに実見しうる基礎をもつような緒原因のみを考察するという手づきをとった」と方法宣言していた(岩波文庫版『政治算術』24ページ)。マーチンの方法宣言はその言い換えに他なるまい。
- (16) ここで悼まれている人物名は、今のところ特定できない。
- (17) 原文、CONTENT,目次であるが、書き方が多分に内容表示であり、また本文に出てくる各章の表題と必ずしも一致しないので、意味を採って内容一覧と訳した。
- (18) ここは「第九章」が落ちたものと思われる。

3-D. 本文

P. 1 第I章、東インド貿易に対する反対論；この貿易で、イギリスで消費される製造品に対して金銀が輸出される；労働者の雇用が失われる；そして地代の引き下げが強制される。東インド貿易は、それが大量の金銀をインドに運び、代わりに、主としてイギリスで消費される製造品を持ち帰るとして一般的に反対される。そしてまた、この貿易に対しては、労働者達による、これによって雇用から追い出されると言う、地主による、これによって地代が減少すると言う、特殊的な不満もある。著者はこれらおのおのに対し、あたかも著者自らが感じているかのように強調したいと考える。

P. 2 まず初めに、この貿易に対する最も一般的な不満、イギリスで消費されるべき製造品に対して金銀がインドに輸出されなければならない。{欄外註、製造品でなく金銀が輸出されると言う一般的不満} これまでインドでは最も安価な物が買われてきた。イギリスで1シリングになる労働と加工はインドなら2ペンス。輸送費は高く関税も高い。貿易商人は大きな利を得、小売商も利を得る。しかもこれら総ての上乗せを含めてもなお、インド品はイギリスの同じ製品よりずっと安い。どんな人も同額の貨幣で最大のものを買おうとする。同じことがインド品についても起こるなら、金銀はインドへ流れる。

インドが我が製造品のいずれかを受容すると信ずべき理由はない。イギリスと東インドの間で労働にこれだけの価格差があり、東インドの労働と加工がここイギリスでのその価格の僅か1/6に過ぎないとしたら、イギリスで1シリングする製造品が、長距離輸送の費用を上乗せして2ペンス以上で売れることはまずないだろう。差額はまず12シリングにはならず、しかもその大部分は輸送費と関税に支払われねばならない。偶然にイギリス製造品がインドへ行くことがな

い限り、商人はまもなくかような貿易を行なわなくなるであろう。

P. 3 法律の助けがなければ、製造品以外に金銀の帰り荷を期待できる理由はない。製造品こそ最も有利な品である。なぜならインドからの未加工品の輸送費は同量の製造品の輸送費と同じだからである。1ポンドの綿花の輸送費は同量のキャラコの輸送費と同額である。生糸の輸送費は同量の絹製品の輸送費と同額である。しかしこの綿花や生糸をイギリスで加工する労働はそれらをインドで加工する労働より遙に高価である。だから、彼の地から輸入される全てのものうち、製造品は最も安価なのである。こちらではそれが最も強く需要される。最大の帰り荷がこれであり、だから製造品以外にインドからの帰り荷はないのである。

そして、製造品が輸入さるべきだとして {欄外註、これらはイギリスで消費される} これらは同様に滞留しななければならない。フランス、ヴェニス、その他の国々で、インド製品は禁止されている。大きな消費はイギリスでなされなければならない。以上の議論から明らかなことは、金銀はインドへ運ばれなければならない、帰り荷は主として製造品でなければならない、これは主とし

P. 4 てイギリスで消費されなければならないということである。しかし、議論を重ねるよりも事実を見るのが良い。金銀の積み荷が毎年インドへ運ばれており、他方、国内にある積み荷の殆ど全てがインド製造品である。そしてこれはインド貿易に反対する確かな証拠として十分であると思われるであろう。それは金銀の膨大な量をインドに運び、代わりに主としてイギリスで消費される製造品を持ち帰る。

この貿易に対する次なる不満は労働者によるものである。インド製造品をイギリスに入れるのを認めることによって、イギリスの製造業は失われ、彼は雇用から追い出されてパンを乞わねばならない。インドの製造品はヨリ少ない労働で輸入される。それはさほど多くの人手を雇わない。インド製品と同じものをイギリス製造業で作るには遙かに多くが雇われなければならない。だから労働者は仕事不足で飢える。

そしてまず、東インドからの物と同じ物をイギリスで作るにはどれだけ多くの労働が必要であるかを示すためになされるべき全てのことは、それぞれの労働の価格を比べることである。

P. 5 東インドの労働は6ポンドの価格のあるモスリン一片を作るに要する価格の小部分をなすに過ぎず、製品価格のおそらく2/3は関税として王へ、また利潤として貿易商や小売り商に行く。もしそうなら、価格の1/3を越えない額が、インド向け金銀の船舶積み荷を整え帰りの船と帰り荷の製品を整える労働を支払うことになる。正確にこの通りであるか否かは別として、インド製造品価格の大部分は王の関税、貿易商と小売り商の利得を支払うことになる。従って価格の大層少ない部分だが、この物を整える労働に支払われることになる。しかし、同じイギリスの製造品では、6ポンドの布切れの価格のうち、殆ど6ポンドが、梳毛工、紡工、織工、染色工、洗張工⁽¹⁹⁾に分割される。王は関税を得られず、商人も利得がなく、殆どすべての価格がその物を製造するための労働の価格である。

P. 6 同じインド製造品価格の僅かな部分が製造のための労働を支払うに足る。それゆえインド製品は同じイギリス産業より少ない価格の労働で作られる。

ここイギリスでは労働量は与えられる賃金に比例する。価格で計られなければならないから、

価格の少ない労働はより少ない労働と見なされる。インドの製造品は同じイギリス製造品より少ない価格の労働で作られる。それゆえイギリス製造業より少ない労働で作られる。

かくも多くの手によって作られるこの王国の製品は、しかし、国内総ての人々に雇用を与えない。多くのものがすでに教区救貧に陥っており、多くのものが雇用の不足のために毎年プランテーションに売られて行く。東インド貿易はしかし実際、製造業の手を減らし、同じ物をイギリスで作るのに必要なより数少ない人々の手で作る。だからそれは救恤民をもっと増やし、他国で雇用を探すためにイギリスから出て行く人を増やす。

この事の理由は明白である。そしてこれは事実の問題として確証される。ノリッジとカンタベ P. 7 リ⁽²⁰⁾ は東インドから輸入されるのと同種の物を作っている。東インド貿易が増えるに依りて、両市の貧民は増えている。近年この貿易が頻繁に行なわれるようになると、両市はほとんど乞食町に陥った。職工たちの叫びを引き合いに出すまでもない。諸教区の求貧税は東インド貿易のおかげで如何に多くの乞食が生れたかを示す十分な証拠である⁽²¹⁾。だからわれわれは、先に述べた結論に、極めて確実に到達する。東インド貿易は雇用不足によって、東インド製品を調達するのに必要な人数以上にイギリス製造品を作るのに雇われたであろう多くの人々を飢えさせる。

この貿易に対する反対論の最後は地主の不満である {欄外註、金銀の輸出によって地代が減ると言う地主の不満}。地代はこれによって減ると言う。農場生産物 (The Produce of Estate) の価額は金銀の輸出によって減るに相違ない。インドの産物をイギリスのあらゆる市場に導入すれば、消費者が減り、賃金が下がる。

同じ量の肉や穀物や布その他の農場生産物を買うのに百万スターリングしかないと思えよ。

P. 8 そして同額が肉一ポンド、小麦一ブッシェル、布一ヤード毎に、あたかも同じ額が増えたものが与えられると思像して見よ。百五十年前には小麦1クォーター当たり5シリング以上することはまずなかった。われわれの時代には40シリングを下回ることは減多にない。生活必需品に対する貨幣の割合は今では何年か前より多い。だから、確かなことは農場生産物に対する貨幣の比率が少ないほどそれに与えられる値は小さくならねばならぬことである。インドへの金銀の輸出によって、農場生産物に対する銀 (silver) の比率は必ずや縮小するであろう。従ってその価額は減少するはずである。

消費者の減少のゆえに買い手数が減少した時には、農場生産物の価格は大きくはなり得ない。東インド貿易は同じ仕事をより少ない労働で行ない、より少なく雇うことで、多くの人口を職から遠ざけ、多くをイギリス外へ追いやり、イギリスに留まることを不可能にする。かくして買い手は減り、従って農場生産物の価額も減る。

P. 9 そして人々の賃金はこの貿易によって減り {欄外註 賃金の低下}、これによって人々は地主に農場生産物に対してさほど多くを与え得なくなる。インド製造品の自由流入によって、総ての人々の賃金は低下するであろう。ある種のイギリス製造業は同種の物のインドからのより安価な輸入によって全く失われ、他の製造業へ移動しなければならなくなるであろう。そして (労働者の大きな増加の際には常に起こることだが) 彼らは低下した賃金で働くことを余儀なく

される。賃金が低下したことによって、他の人々の賃金を引き下げる。賃金低下は一般的な現象になる。こうしてイギリスの労働者は、つりは国家の中心体は、農場生産物に対して地主にヨリ少なくしか与え得なくなり、それゆえその価格は低下しなければならない。

しかし、仮にイギリスからインドへ運ばれる金銀がなくとも、もし買い手が以前同様にあり、賃金が以前同様の高さに保たれたとして、{欄外註、地主独占の破壊} 貨幣と買い手の増加がなければ、イギリス農場生産物の価額は、インド生産物をイギリスの総ての市場に入れば、以前の貨幣と売手との比率に比べて売手と売られる物が増加したことによって低下する。

P. 10 貨幣と買い手との割合は、ダンチッヒとイングランドの小麦の場合イングランド小麦だけの場合と同じではない。同様なことが、イングランドだけの畜牛とアイルランドの牛肉やオランダ鯨との関係でも言える。いわんや毛織物およびインド製造品と毛織物だけの場合も同様である。従って売手の増加、売り物の増加は、以前の貨幣と買い手の比率を越える貨幣と買い手の増加がなければ同じ結果になる。東インド貿易は金銀を輸出し消費者の数を減らし、少なくとも貨幣と買い手双方を増やさない。仮に売手と売り物の増加でなくとも⁽²²⁾、東インド商人はイギリス地主と同様になり、貨幣と買い手の以前の比率を越えて同じ市場に持ち来られたインド生産物は、イギリスの農場生産物と同じ市場に持ち来たられ、従って東インド貿易は、以前の貨幣と買い手の比率を越えて、売手と売り物を増やし、イギリス農場生産物と地主に害を与える。最後に、もし貨幣と買い手が増えないとしたら、地主はその小麦に、ダンチッヒからの小麦で満ち

p. 11 ている市場、オランダ鯨やアイルランド牛で満ちている市場でその牛肉や羊肉に、またインドその他の国の製品で満ちている市場で、総ての物が禁止されており総ての物を自ら持っている市場でと同じ高さの価格を要求し得るであろうか。だから、地主は以前の貨幣と買い手の比率を越える同じ物の売り物と売り手が増えることによって、農場生産物に対して同様な良い価格を要求し得なくなるのである。東インド貿易はこれに対して、地主と農場生産物に対する、同様な物の売手と売り物を、貨幣と買い手との以前の比率を越えて増やすことで罪がある。従ってこの貿易によって、インドの生産物をイギリスのあらゆる市場に導き入れることによって、イギリス農場生産物の価額は必ずや減少するであろう。かくして、インドの生産物をイギリスの市場に入り込ませると、地金の輸出によって、消費者の減少によって、賃金の低下によって、イギリス農場生産物の価格は、つまりは地代は、減少する。それゆえインド貿易に対する総ての反対論

P. 12 は維持される。イギリス国内で消費されるインド製品に対して金銀が輸出される。労働者は雇用から追い出される。地代は減少する。

第II章 インド製品に対する金銀の輸出は、ヨリ少ない価値によるヨリ多い価値との交換である。

さて、今やこれら反対論に対する反論を考えるべき時である。まず第一に、金銀の輸出とインド製品の消費について、以下のことが言われる。インド製品に対する金銀の輸出は、ヨリ少ない価値のヨリ多い価値との交換である。この交換はヨリ多くの金銀を輸入するための最もありそうな途である。イングランド王国はイギリス製造品を消費するよりもインド製造品を消費することによってヨリ貧しくなりはしない。インド製造品に対する金銀の輸出は、ヨリ少ない価値による

より多くの価値との交換である。

P. 13 それは金銀を、商人にとってのみならず王国全体にとってもより多くの価値のある製造品と交換することである {欄外註、外国で交換される物}。おのおの銀量の価値は確かに無限でない。この物の価値を言い表し、測定し他の物の価値と比較する方法がなければならない。イギリス中の製造品全量が1シリングに値しないとは誰も言うまい。また銀の最小限の量がその最大限量より王国にとって価値があるとは言うまい。製造品にしる他の何にしる、外国で金銀の或る量を調達するに足る物はそれ相当の価値を持っている。だから百ヤードの布がスペインと貨幣百ポンドと交換できるなら、両者は同じ価値を持つのである。百ヤード以上はもっと大きな額を調達するに足るのだから、それゆえ必ずもっと多くの価値を持つ。だから、わが製造品にしる何にしる、そして如何なる量であるにせよ、外国で金銀に交換出来る物は王国にとって同じ金銀分の価値を持つことは確かなのである。

そして製造品にせよ何にせよ、イギリスで貨幣に対して売られる物は、王国にとって貨幣相当額の価値が、つまりそれだけの金銀に相当する価値があることは確かである。{欄外註、海外で交換される物は、ましてや国内で交換される物は、価値がある。} と言うのは、これらは同額の

P. 14 金銀で輸出される製造品より良いものだからである。我々は、金銀を購入するために何種類の物がイギリスから運び出されなければならないか確かには知り得ない。しかし、一般的に確かなことは、海外で如何なる量の金銀を買うにせよ、同量をイギリス国内で買うのよりより多くもしくはより良い物は送り出されないことである。貿易商はこの種の取り引きをすぐに敬遠するであろう。彼はイギリスで百ポンドで購入した布が、外国ではもっと高く売れると期待する。あるいは、もし彼が海外市場でより高く売れるのを期待しないなら、彼はこの布を国内でより安く購入したであろうことは確実である。だからここから、金銀を国内で購入するのに必要な製造品より良質の製造品が海外で金銀を調達するために輸出されることはないと言え。そしてそれゆえ、もしこれらがどこか外国で或る量の金銀と交換されるのであれば、イギリスで金銀と交換出来る製造品はイギリスにとって同量の金銀と同じ価値を持つことになる。

外国で或る量の金銀と交換し得る製造品は、ましてやイギリス国内で或る量の金銀と交換し得る物は、王国にとって同じ価値を持つのである {欄外註、そしてそれゆえインドかららの帰り荷

P. 15 である製造品はもっと価値がある}。しかし、東インドへ送られる金銀の帰り荷として、イギリスで金銀で買うより良い物が送られることは確かである。これこそこの貿易に対する不満の原因であり、かつ事実の問題である。これが、なぜより良い製造品が、それと同価値と証明済の金銀の帰り荷としてインドから送られるかの理由である。かくしてより少ない価値によってより多い価値との交換が行なわれるのである。そしてまた、わが王国はこの交換によって利得者となる。金銀の帰り荷としてインドから来る製造品は、イギリス国内で交換される物より良質であるばかりか、或る量の金銀に対して海外で売られる物、自ずから輸出され海外市場で高値に売れる物よりも良質なのである。ここイギリスにおけるインド製造品の消費は、輸入禁止が企

P. 16 てられているからにはそう長くは続くまい。しかし金銀は、国内で消費出来ないために外国市場へ流出しなければならない製造品に対して以前同様流出し続けている。今や商人は、

イギリスで全く売ってはいけない、海外市場でより多くの金銀に対して売ることの出来ないインド製品に対して貨幣を投ずることはしない。なぜなら、東インドへ金銀を送る貿易はそれを同額の製造品に換え、海外でより多くの価値に換えるために行なわれる。これがより少ない価値によるより多くの価値との交換である。

最後に、個人にとってにしろ国家全体にとってにしろ、真実で主要な富は、肉、パン、布、家屋、生活必需品と同様便益品、これらのいくらかの洗練と改良、所有と利用と享受の安全である。〔欄外註、帰り荷としての製造品は主要かつ価値のより多い富となる〕。これらはそれ自身のためのものである。貨幣は、これらを購入し得るから富と見做される。だから金銀は二次的で従属的な富であるに過ぎない。布や製造品は実質的で第一義的な富である⁽²³⁾。これらの物が世界全体の富であると見做されないであろうか？これらの物が豊かな国が最富国と思われていないだろうか？ オランダは諸国製造業の宝蔵である。ここではイギリスの布、フランスのワイン、イタリアの絹製品が山と積まれている。もしこれらが富でなかったとしたら、オランダ人はこれら

P. 17 に金銀を投じはすまい。さもなくば彼らはこれらを市場にとどめることなく、直ちに金銀に換えるであろう。以上を要約すれば、布は真実で第一義的な富の一部であり、それゆえそれ自身の本性によってより価値があり、金銀は第二次的で従属的な価値であるに過ぎず従って本性上それほど価値はないことが判る。金銀を布に交換することは、本性上さほど価値がなく用途のない物を、もっと価値のある、直接役に立つ富に交換することである。金銀をより多くの布に、他のどこかで同一量の金銀に交換し得るより多くの製造品に交換することは、より少ない価値のより多くの価値との交換である。金銀を東インドに向けてその国の製造品に対して輸出することは、他の地で同量の金銀によって調達するよりもより多くのより良い製造品と交換することである。従ってより少ない価値をより多くの価値と交換することである。金銀をインド製造品と交換することは、同額の金銀をより価値のある製造品、同額の金銀を調達するために輸出される

P. 18 製造品より価値のある物と、すなわちより多くの金銀と自然に交換されたかも知れない製造品と交換することである。そして第二次的富を第一義的な富の、他のいずれの場所で同額の金銀で得られるより多くの量と交換することである。以上で、インド製造品を金銀と交換することは、少ない価値を多くの価値と交換することであると十分に証明された。

註

- (19) これで、イギリス製造品が主として手工業的に製造された毛織物と考えられていることが判る。それは当時のイギリス最大の輸出品であった。これに対して、インド製品のキャラコは上質の綿製品。また絹織物も輸入されていたことが判る。
- (20) Norwich, Canterbury, いずれもイギリス毛織物の大産地。
- (21) マーチンは、The SPECTATOR No.232, 1711年11月26日で、分業によって生産性を上げれば雇員が増え、救貧は要らなくなる、との趣旨を述べていた。救貧の分析としてそれなりの意味はあるが、分業の事例は懐中時計製造で、ペティに敬意を表している。マカロックはここを不注意に読んだために、ペティが懐中時計の例を述べなかったと即断してしまい、後にマルクスが徹底的なマカロック蔑視を続ける原因を作った。参照、馬場宏二『『経済学批判』の批判』、馬場前掲『もう一つの経済学』第11章。

- (22) ここは、原文はBut for the increase of Sellers and like tilings……であって、後の文と同義反復になってしまうので、明快に訳せない。訳者の誤解によるのか原文の推敲不足によるのか？
- (23) マーチンが価値と使用価値を区別出来なかったことは、この用語法からも判る。ただし、ここで述べられた富の概念は、重金主義の富貴金属説からペティの、貴金属に重点のある富貴金属日常消費財両立説を経て、古典派の富消費財堆積説に至る経過点を示すものとして興味深い。参照、馬場「富概念の推移」、馬場前掲『経済学古典探索』

(第二章終わり)